群教セ	G11 － 03
	令4.281集
	特活－小

意見のよさを追求しながら、自分たちで学級をよりよくしようとする児童の育成

――学習過程ごとの目的を明確にした指導の工夫を通して――

特別研修員　遠藤　志穂

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

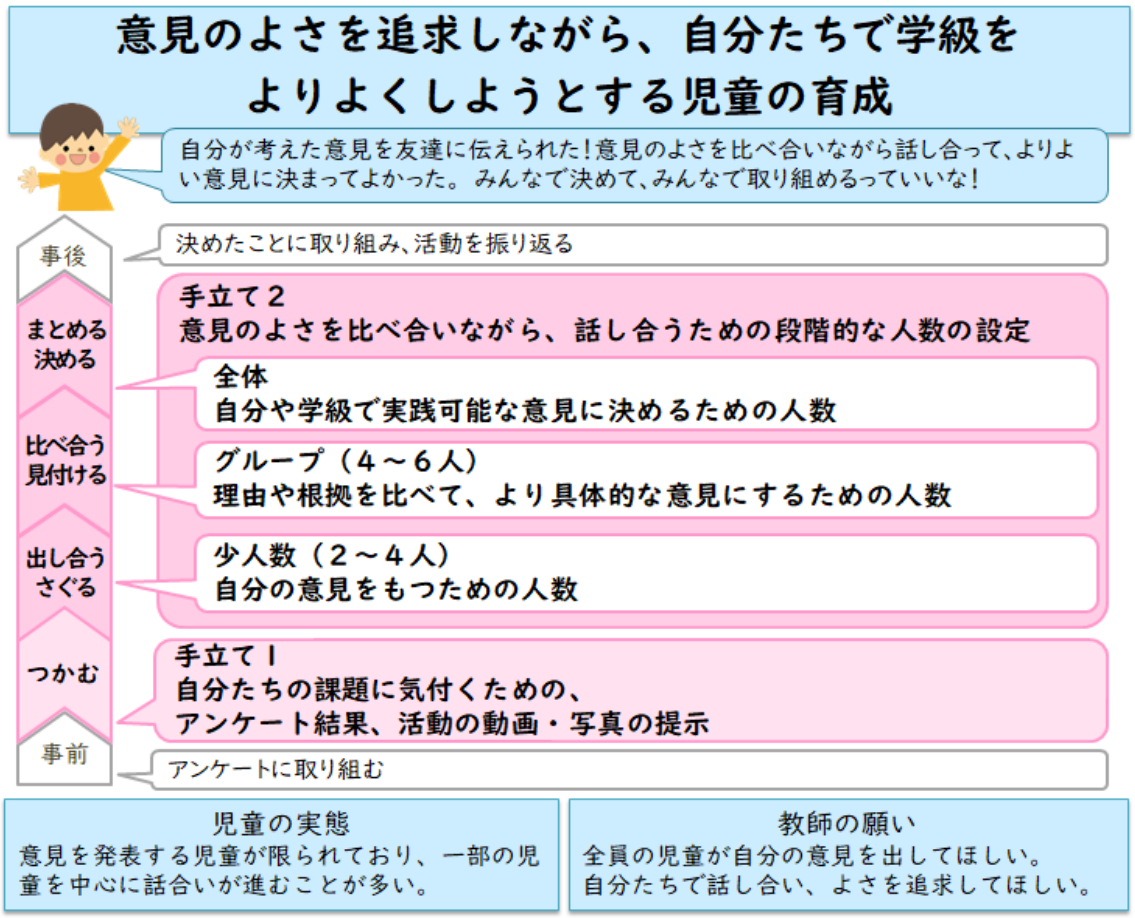
学習指導要領総則における総説では、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくこと」が求められており、学び合いの中で自らの考えや理由を伝え、集団として多様な意見をまとめていく能力の必要性が指摘されている。

本学級の児童は、話合いの進め方に従って、自分たちで話し合うことができるが、発表する児童が限られており、それらの児童中心に話合いが進む傾向にある。これは、児童が、自分たちの課題を捉えることができないことや、意見をもつことができても、発表する機会を得られないまま話合いが終わってしまうことが原因と考えられる。このような児童が、自分の意見を発表し、意見の理由や根拠のよさを比べて、よりよい方法や目標に決めていく経験を積み重ねていくことが大切であると考える。どの児童も、自分の意見をもち、学級みんなで話し合い、事後の活動で実践して、話し合ってよかったという実感をもたせたい。

そこで、過程ごとの指導方法を工夫することに重点を置き、意見のよさを追求し、自分たちで学級をよりよくしようとする児童を育成することを研究テーマとして設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

自分たちで学級をよりよくしようとする児童の姿とは、友達と協力して一つのことに向かいそのことについて自分の意見をもち、友達に伝え合うことのできる児童と考える。このような児童を育成するために、学習過程ごとの目的を明確にした以下のような手立てを考え、実践していくこととした。

手立て１　自分たちの課題に気付くための、アンケート結果や、活動の動画・写真の提示

事前に議題・題材に沿ったアンケートを行ったり、話合いの内容に合った動画や写真を撮影したりする。それらの結果や様子をつかむ場面で提示し、学級や個人の課題を把握するとともに、自分事として捉えることができるようにしようと考えた。

手立て２　意見のよさを比べ合いながら、話し合うための段階的な人数の設定

よりよい意見に決定していくために、話し合う人数を少人数、グループ、全体というように段階的に増やしていくように工夫をする。まず、課題について、２～４人程度の少人数で自由に話をしながら自分の意見をもつことができるように設定する。次に、意見のよさを比べるために少人数同士を合わせ、４～６人程度のグループで話し合う活動を設定する。グループでは、それぞれの意見を理由や根拠も述べながら発表し、それらのよさを比べ合いながらより具体的な意見にしていく。最後に、グループで出た意見を全体で共有し、自分や学級の現状に適切と思われる意見に決定していく。このように、各過程の話合いの仕方を明確にし、人数も段階的に設定することで、全員が意見を出すことが可能になり、理由や根拠を比べながら、よりよい意見に収束することができると考えた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　アンケート結果や自分たちの活動動画を提示したことにより、児童は自分たちの様子を客観的に捉えることができた。また、自分たちの課題にも気が付くことができ、話合いをすることで解決していこうとする姿が見られた。このことから、児童は課題を自分事として捉えられたことが出し合う・さぐる場面での発言につながったと考える。

○　意見のよさを比べ合うために、話合いの人数を段階的に設定したことにより、学級全員の前では発表が難しい児童も、つかむ場面では、思い付いた意見を他の児童に話すことができた。グループでの話合い活動では、少人数で話してきたことをそれぞれが発表し、それらの意見のよさについて比べ合い、よりよい意見にすることができた。全体での話合い活動では、グループで出た意見を発表し、実践可能な意見にまとめながら、よりよい意見に決定することができた。このように、意見のよさを比べ合うことで、よりより意見に収束していくことにつながった。

○　全員が意見をもって発表し、より適切な意見に決めることにつながり、自分たちで学級をよりよくしようとする姿を引き出す上で有効であったと言える。

２　課題

○　アンケート内容は、議題・題材に迫り、学級の課題がはっきり出てくるように内容を吟味し、厳選する必要がある。同じく動画も、課題が児童にとって分かりやすい内容にするとよい。そして、理想の姿と実際の様子の違いから、自分の意見をより具体的にもつことができると、話合いが深まると考える。関連する動画は、教師が準備していたが、計画の段階で撮影内容を児童と話し合って決め、計画委員の児童が中心に撮影ができるようにしたい。そうすることで、児童中心で運営し、自分たちで学級をつくっていくよさをより実感できると考える。

○　実現可能な意見に自分たちで決めるための話合いの過程を定着させるために、繰り返し合意形成や意思決定の過程を踏まえた話合い活動を行っていく必要がある。

実践例

１　題材名　　「自分の仕事の仕方を見直そう」学級活動(3)（第４学年・２学期）

２　本題材について

本題材は、働くことの意義を理解することや、多様性を認め合いながら、友達と協力して学級の一員として働いていく大切さについて考え、自主的に自分の役割を実践しようとする児童を育成することをねらいとしている。事前では、当番や係の活動についてのアンケートを実施し、本時への意欲付けを行う。本時では、アンケート結果や仕事をしている実際の様子を動画で視聴し、本時のめあてを立てる。そして、題材について、三人組での話合いで自分の意見をもち、六人組で話し合って、よりよい具体的な意見にしていく。話し合われた解決策を全体で共有し、それらいくつかの考えを参考にしながら意思決定をする。その際、児童は学習プリントに記入をしていくが、活動することがらを詳しく書けるよう指導する。事後では、決めたことの振り返りを一週間続け、仕事の仕方を変えてみてどう感じたか、活動全体の振り返りを行う。

目標	(1)　知識及び技能 働くことや学ぶことの意義を理解するとともに、自己のよさを生かしながら将来への見通しをもち、自己実現を図るために必要なことを理解し、行動の在り方を身に付けるようにする。 (2)　思考力、判断力、表現力等 自己の生活や学習の課題について考え、自己への理解を深め、よりよく生きるための課題を見いだし、解決のために話し合って意思決定し、自己のよさを生かしたり、他者と協力したりして、主体的に活動することができるようにする。 (3)　学びに向かう力、人間性等 現在及び将来にわたってよりよく生きるために、自分に合った目標を立て、自己のよさを生かし、他者と協働して目標の達成を目指しながら主体的に行動しようとする態度を養う。
評価規準	(1)　よりよい生活を築くための知識・技能 希望や目標をもつこと、働くことや学ぶことの意義を理解し、将来への見通しをもち、自己実現を図るために必要な知識や行動の仕方を身に付けている。 (2)　集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 希望や目標をもつこと、働くことや学ぶことについて、よりよく生活するための課題に気付き、解決方法などについて話し合い、自分に合った解決方法を意思決定して実践している。 (3)　主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 現実及び将来にわたってよりよく生きるために、見通しをもったり振り返ったりしながら、自己のよさを生かし、他者と協働して、自己実現に向けて意欲的に行動しようとしている。
過程	主な学習活動
事前の活動	・当番活動、係活動について振り返り、アンケートに答える。
本時の活動	・アンケート結果や動画視聴から、本時のめあてを立てる。 ・どのように仕事をしていくのがよいか少人数で話し合い、自分の意見をもつ。 ・より具体的な仕事の仕方をグループごとに話し合い、ＩＣＴに入力し、出された意見を全体で確認する ・話し合ったことを参考にしながら、個人の目標を決め、学習プリントに記入する。
事後の活動	・自分で決定した目標を意識しながら、一週間仕事に取り組む。 ・目標が達成できたか、帰りの会で振り返り、学習プリントの振り返り欄に〇を付ける。 ・一週間の仕事の様子を振り返り、自分の目標に向かって取り組んで思ったこと、感じたことを学習プリントに記入する。

３　本時及び具体化した手立てについて

本題材では、課題を自分事として捉え、話合いを通して、日頃の自分を振り返りつつ、出された意見の中から、自分が進んで実行できそうな具体的な仕事内容を個人目標として設定することを重視して、次のように具体化した。

手立て１　自分たちの課題に気付くための、アンケート結果や、活動の動画・写真の提示

自分たちの様子を客観的に捉えることができるよう、つかむ場面では、当番や係活動のアンケートの結果を提示し、事前に撮影した給食やそうじの様子を視聴する。さらに、手本となる友達や上級生の様子を撮影した写真を提示して、自分たちの仕事ぶりとの違いから、よりよい仕事の仕方について考えるきっかけとなるようにする。

手立て２　意見のよさを比べ合いながら、話し合うための段階的な人数の設定

さぐる場面では、よりよい仕事の仕方について三人組で話合いをして、自分の考えをもつ。その後の見付ける場面では、三人組同士で組み、六人組となって、それぞれの意見を出し合う。出された意見の理由や根拠を比べ合いながら、具体的な意見にしていく。まとめた考えを代表者がＩＣＴに記入する。決める場面では、ＩＣＴで提示された意見を代表者が発表する。出された意見を参考にしながら、個別に具体的な言葉で活動目標を書けるようにする。

４　授業の実際

(1)　事前の活動

学級内の課題や問題を把握するために、当番・係の活動について振り返り、アンケートに取り組む。司会担当の児童は、本時の流れを司会進行表と照らし合わせて確認し、役割の分担や読み合わせをする。

(2)　本時の活動

①　つかむ場面

アンケート結果や掃除・給食場面を撮影した動画を提示したところ、どの児童も自分の思ったことを、学習プリントに書くことができた。これは、自分たちの活動の様子を、動画で改めて見直したことにより、課題を自分事として捉えることができたからだと考える（図１）。

図１　提示した上級生の様子

②　さぐる場面

二人組の交流だと話合いが深まりづらく、４、５人だと課題について考えず、他の子に任せてしまう児童が出てくるため、三人組で交流をしたところ、どの児童も自分の意見をもつことにつながった。これは、意図的に児童全員が発言できる機会を設けて、感じたことを互いに伝え合ったことで、自分の考えがよりはっきりしたからだと考える（図２）。

図２　三人組での話合いの様子

③　見付ける場面

三人組のままでは、意見の数が少なく、考えに偏りが生じ、よりよい意見を見付けることにつながらないと考え、交流の人数を六人組にした。六人組で自分の意見を友達へ伝えたところ、どのグループも活発な意見交流ができた。また、意見の理由や根拠を比べながら聞き合うことで、抽象的な意見から、より具体的な意見へ話合いを進めることができた。これは、グループの話し合いで、多くの意見を比較することにより、さぐる場面よりも話合いが深まり、学級の実態に合った意見にまとめられたからだと考える（図３）。

図３　六人組での話合いの様子

六人組で話し合った結果は、代表者がＩＣＴを使って、学級全体へ見えるようにした（図４）。

④　決める場面

ＩＣＴに入力した内容を、代表者が理由を付け加えながら発表したところ、どの児童も他のグループの意見をしっかり聞くことができた。個人の目標を決めるときには、段階を経て、十分な話合いをしてきたことで、自分に合った仕事の方法を詳しく書くことができた。これは、何度も

話合いを重ねてきたことによって、課題を深く考え、自分に合った目標をもつことができたからだと考える。

また、グループから出された意見は、個人の意見が反映された結果、出てきた意見であったため、クラス全体で納得して、意見を決めることができた。

学習プリントを見ると、「これまでは仕事を忘れていたときもあった。」や「ふざけてしまうこともあった。」など、自らの振り返りができた児童がいた。その上で、「すみずみまでそうじをする。」「床にごみが落ちていたら拾う。」など具体的な言葉で書くことができた。また「自分のことだけでなく、仕事が終わったら手伝う。」「友達のことも考え、協力する。」と学級全体のことを考えて記述できた児童も多かった（図５）。これは、六人組で話し合った内容を全体に説明したことで、それらの意見に納得でき、自分に落とし込んで考えられた結果だと言える。

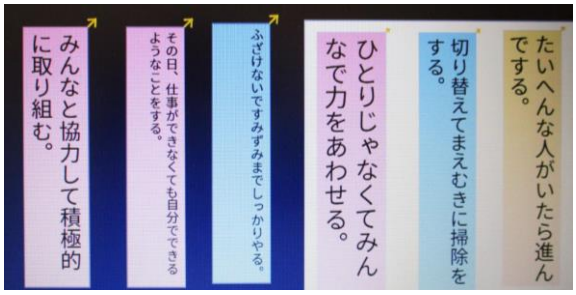


図４　全体に発表された意見

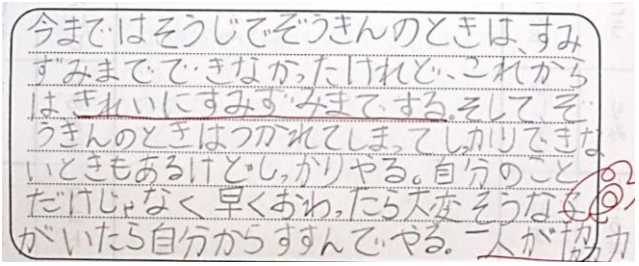


図５　学習プリントに書かれた目標

(3)　事後の活動

一週間、自分の決めた目標に沿って仕事をした。本時の活動で、詳しく個人の目標の設定をしてきたところ、掃除で隅々まで拭く様子や率先して手伝いする様子など、話合いをする前よりもがんばって仕事をする姿がたくさん見られた（図６）。また、当番活動を忘れていたり、そうじでふざけてしまったりして、友達からできていない点を指摘されても、反抗せず素直に改善できる姿が見られた。本時では、個別に目標を決めたが、クラス全体でしっかり話し合ってきた過程を経てきたことにより、仕事についての意識が高まったと考える。

図６　事後のそうじの様子

５　考察

アンケート結果を提示したときには、「仕事をやっていない子もいる。」と、できていない点に着目し、発表できた児童もいた。さらに、手本となる上級生の様子を写真で見たことで、これから向かうべき課題がより明確になり、全体で確認することができた。これらの提示と友達の発表から、普段自分の考えをもちづらい児童や学習プリントなどに一言書いて終わりになってしまう児童も、自分の考えをもつことにつながったと考えられる。

三人組の話合いでは、意見を述べることをためらっていた児童も、他の二人に促されて、自分の考えを伝えることができた。「いいね。」「その考え、大切だよね。」と声を掛けられ、その児童は恥ずかしそうな、嬉しそうな表情をしていた。また、全体に対し、自分の考えをなかなか伝えることができない児童が、三人組ではきはきと自分の考えを伝え、六人組でも輪の中に入り、一生懸命に話し合っている様子が見られた。これらの児童に関わらず、他の児童も、三人組でも六人組でも友達の意見を丁寧に聞きながら、話し合うことができ、決める場面で目標を詳しく書くことができた。以上のことから、話合いの人数を段階的に増やす手立ては有効であったと考えることができる。

このような手立てで、繰り返し学級活動を行っていくと、児童主体で学級会を開いたり、他教科でも三人組で話し合って解決しようとしたりする様子が見られるようになった。児童が、主体的に学級をよくしていこうとする態度の育成につながったことが考えられる。